

家庭科における他領域との関連および小中高等学校での学習の積み重ねとなる 教材開発：新学習指導要領・教科書への対応

倉持 清美（東京学芸大学 教職大学院 教育実践創成講座）
藤田 智子（東京学芸大学 生活科学講座 家庭科教育学分野）
渡瀬 典子（東京学芸大学 生活科学講座 家庭科教育学分野）
萬羽 郁子（東京学芸大学 生活科学講座 生活科学分野）
西岡 里奈（東京学芸大学附属小金井小学校 家庭科）
関野 かなえ（東京学芸大学附属世田谷中学校 家庭科）
菊地 英明（東京学芸大学附属国際中等学校 家庭科）
石津 みどり（東京学芸大学附属小金井中学校 家庭科）
神澤 志乃（東京学芸大学附属竹早中学校 家庭科）
衆原 智美（東京学芸大学附属高等学校 家庭科）

代表者連絡先：kkiyomi@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】 家庭科 住居 家族・家庭生活 領域横断

1 本プロジェクトの目的

今回の学習指導要領の改訂に伴い、小・中・高等学校の家庭科では、A 家族・家庭生活、B 食生活、C 衣生活と住生活、D 消費生活・環境、という枠組みから、A 家族・家庭生活、B 衣食住の生活、C 消費生活・環境、と変更され、内容が整理されるとともに、小中高等学校で共通した領域区分となった。その結果、小・中学校では、引き続きA 家族・家庭生活の学習の一部を最初に位置付けることで、2 年間および3 年間の学習の見通しを持たせることになっている。つまり、A 領域の学習を通して、学習者自身の家庭生活を再認識し、それを基に他領域と関連をはかりながら学習するといえる。

このような変化を受け、学習指導要領および検定教科書等を改めて分析し、他領域とより関連させた学習が可能となるような教材や授業案、学校段階ごとで学ぶ内容をすみ分け、学習の積み重ねとなるためのポイントを明確にした教材や授業案を提案することが求められている。また、それらの教材を用いた授業によって、新学習指導要領を踏まえどのような資質能力が育成されるかも明らかにする必要がある。よって、本プロジェクトでは、学習指導要領および検定教科書等の分析を行うとともに、小中高等学校において授業実践を行い、その効果と育成される資質能力を明らかにすることを目的として研究を行った。1 年目は、小学校を中心に研究を行い、2 年目は中学・高等学校に関して研究を進めた。その際、大学の教科専門と教科教育担当者、附属学校教員が連携して行い、それぞれの専門的な知識や経験を活かした授業開発を行った。本報告書では、小学校・中学校における分析を中心とする。

2 本プロジェクトの実施内容

(1) 学習指導要領および教科書の記述分析

- ・ 小学校・中学校の各々の家庭科に関する学習指導要領を分析した。
- ・ 小学校・中学校の検定済み教科書について分析した。

(2) 授業実践の分析

小学校

小学校家庭科で、領域横断的な学習の可能性を検討するために、学習指導要領家庭科編の「B 衣食住の

生活(6)「快適な住まい方」の内容に、家族や他者の視点、環境への配慮など「A 家族・家庭生活」「C 消費生活・環境」を視野にいれて授業実践を行った。本題材のねらいは、「快適な住まい」になるように整理・整頓や清掃の仕方について工夫し、他者や環境にも配慮して実践できるようになることとした。

まず、児童が多様な立場から「快適な住まい」を考えられるために、導入として絵本を活用した。その中には、家事を一人ですることの困難さが伝わるような内容の絵本も入っている。授業で自分にとっての快適な空間を考えさせた後、課題として家族にインタビューをして、家族はどんな空間を快適と感じているのか、困っているのはどんなことをワークシートに記入するようにした。また、OPPシートを使用して、学習前と学習後の自分の考えを可視化でき、比較することができるようにした。そして、「汚れをなくす・周りを気遣う・環境を考える」という3つの視点を児童と共有し、快適空間スペシャリストになるための実践を展開した。授業は毎回、ビデオカメラとICレコーダーを使用して記録した。また授業前後に児童の実態を把握し、先述した資質能力について検討するために質問紙調査を実施し、ワークシートについても分析の対象とした

中学校

中学校技術・家庭科(家庭分野)で、「よりよい住まい方を考える」をテーマに、学習指導要領「B衣食住の生活」(6)ア、イを中核に据え「A 家族・家庭生活」「C 消費生活・環境」と関連を図り8時間の内容を構成した。授業の目標として「情報を適切に活用し、より良い家族関係や豊かな住生活に向けて自分の考えを持つことができる。」「自分自身の家族関係・住生活を見つめ、課題に気づき、その課題の解決に向けて、考えたことを自らの生活に生かそうとする」の2つを設定した。まず、住まいに関する100冊の本から、自分の興味のある本を読み、紹介する活動をして、住まいに関する多様な課題に気付けるようにした。住まいに関する基本的な知識を学んだあと、グループごとにファミリーとなって住まいの計画をした。幼児か高齢者のどちらかをファミリーに含むようにメンバーを構成した。発表する際は、より良い住まい・住まい方を考える上で大切にしたい視点や、工夫を紹介するとともに、自分の担当する役割で考えたこと、中学二年生の自分として考えたこともワークシートに書かせた。授業の前後で質問紙調査を実施し授業の様子については、ビデオカメラを使って毎回記録した。

3 本プロジェクトの研究成果

(1) 学習指導要領・教科書

小学校

小学校の新学習指導要領解説と旧学習指導要領解説の家庭編についての分析結果を取り上げる。領域横断を示す「関連」という言葉に着目すると、新学習指導要領解説家庭編では86回出現するが、旧については67回であった。KH-Coderを使用して、クラスター分析を実施したが、特に大きな違いは見られなかった。領域横断の重要性が高まってきたことと、新学習指導要領の内容の変化に伴い、関連する領域が増えたことによるものと思われる。

次に、他領域と連携することが多い「家族・家庭生活」と、小中高と学習内容が系統的に捉えにくい住生活領域に着目し、領域横断の可能性について、学習指導要領の記述から検討することとした。住生活領域で扱う範囲は、系統的にみると、小学校では身の回り、中学校では住まい、高校では地域・環境と広がっているので、小学校のうちから家族や地域の視点を持つておくことは必要だといえる。一方、家族・家庭生活領域では「自分の成長と家族・家庭生活ア 自分の成長を自覚し、家庭生活と家族の大切さや家庭生活が家族の協力によって営まれていることに気付くこと。」としており、自分を知り、他者についても考えられることが目指されている。系統的にとらえると、中学高校で、乳幼児や高齢者への発達の理解をベースとし

て関わり方を学ぶため、他者の視点をもって考えることができることが重要となる。住生活領域と家族・家庭生活領域を横断していくことで、住生活領域の学びに家族、あるいは地域の人の立場に立って考える機会を与え、系統的に知識・技能をとりえやすくなると予測できる。そのことが、協働する力や他者との共感する力、自分自身を見つめ批判的に捉えなおすといった資質能力を育成することにつながると考え、授業を考案することとした。

教科書については、旧と新学習指導要領に依拠している小学校の教科書について、調査することとした。小学校家庭科では、2冊の検定済み教科書がある。特に住生活領域に焦点を当てると、旧では「整理・整頓」の部分の写真に自分の部屋を掲載していたが、新では家族で共有する場所の写真が掲載され、他者の視点に立った「整理・整頓」が促されるようになっていた。教科書の面からも、「家族・家庭生活」と横断することでの学びの深まりが期待される。

中学校

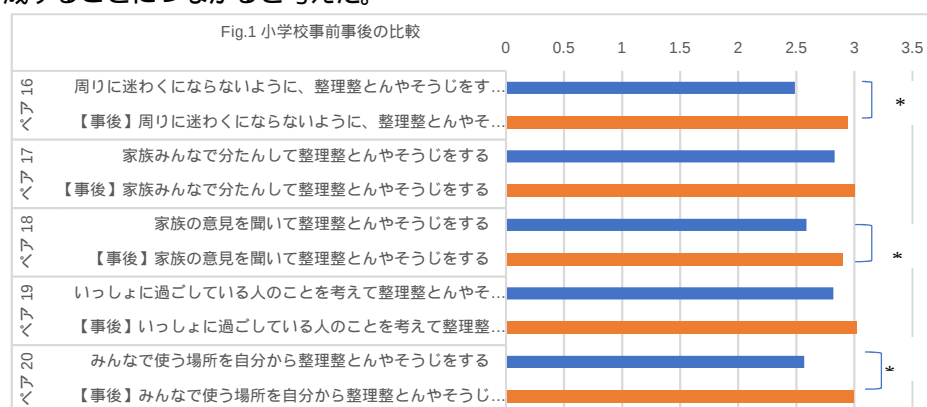
中学校については、住領域では「(ア) 家族の生活と住空間との関わりが分かり、住居の基本的な機能について理解すること。(イ) 家庭内の事故の防ぎ方など家族の安全を考えた住空間の整え方について理解すること。」が目指されており、学習指導要領解説の住領域では「家族」が32回と頻出している。「家族・家庭生活」では、「ア 自分の成長と家族や家庭生活との関わりが分かり、家族・家庭の基本的な機能について理解するとともに、家族や地域の人々と協力・協働して家庭生活を営む必要があることに気付くこと。」が目指されている。また幼児や高齢者について学び、理解を深めることになっている。中学では、自分の成長を実感したうえで、自分の知識や技能で、住空間を整えていく力を身につけ、家庭科の目標である「生涯にわたって自立し共に生きる生活を創造すること」を実現していくためには、住領域と家族・家庭生活を横断することが有効と考える。

中学校家庭科の教科書3社の住領域の記述には、「家族」が頻繁に用いられ、共に生活する家族に配慮する空間の必要性が述べられている。一方で、自分にとってなぜ「住」は必要なのかという根本的な問いかけはそれほど見られない。災害や戦争で住居が奪われてしまう状況、中学生にとって「居場所」の必要性が述べられている現状では、自分にとって「住」の役割を考える授業の展開が必要と考え、考案することとした。また、そのことが、協働する力や他者との共感する力、自分自身を見つめ批判的に捉えなおすといった資質能力を育成することにつながると考えた。

(2) 授業実践

小学校

質問紙調査の結果から、授業前の生徒の実態として、整理整頓についての知識がそれほどなく、他者のことを考えて整理整頓する意識も低



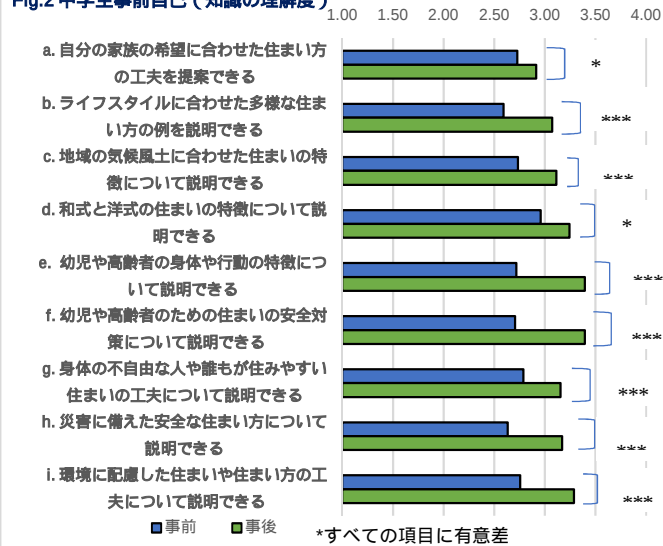
いことがわかった。自分の場所や共有スペースは整理整頓してはいるものの、家の周りや、地域清掃についてはそれほど実施していなかった。授業後については、それらの得点が上昇するとともに、協働する力や他者との共感する力、自分自身を見つめ批判的に捉えなおすといった資質能力の得点の上昇も見られた (Fig.1)。ワークシートには、「前は自分だけが過ごしやすい空間が快適だと思っていたけど、他の人が感じる快適さの価値観もある。みんなが快適だと思うようにすれば、もっと快適になる」などの記述がみられ、

他者の視点を持つことができている様子がうかがえた。

以上の結果から、住生活領域と家族・家庭生活領域とを横断することで、他者の視点をもって住まいを見直し実践することが可能となり、中学校の学習内容となる「家族との住まい」「他者とともに暮らす」につながるための学びを作ることができた。

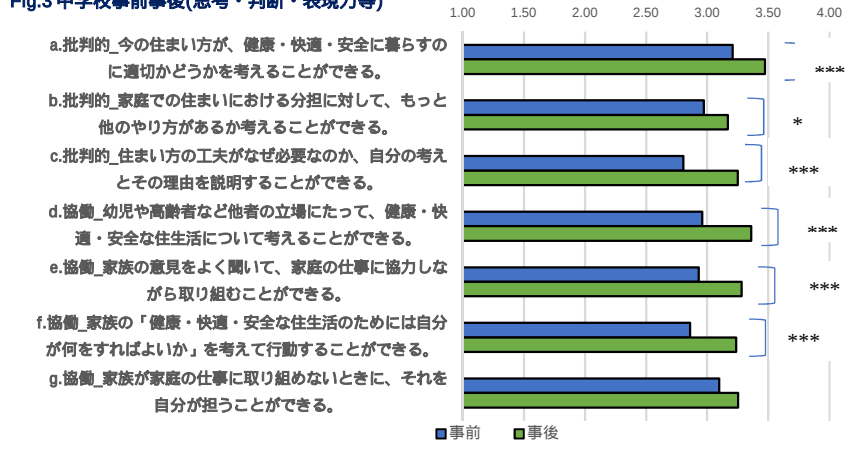
中学校

Fig.2 中学生事前自己（知識の理解度）



生徒の実態として、幼児と接した経験がほとんどない生徒が多く(64%)、高齢者と一緒に住んでいる(住んだ経験のある)人は15%程度で、年に数回接している人が大部分であり、異なる世代との生活経験があるものが少なかった。授業によって育成された資質・能力を確認するため、授業前後の質問紙調査で対応のあるt検定を行った。「自分の家族の希望に合わせた住まい方の工夫を提案できる」といった住まいに関する知識・理解度、「幼児や高齢者など他者の立場にたって、健康・快適・安全な住生活について考えることができる」とい

Fig.3 中学校事前事後(思考・判断・表現力等)



った協働する力、「幼児や高齢者など他者の立場にたって、健康・快適・安全な住生活について考えることができる」といった他者への共感・受容・敬意などは授業後に有意に伸びていた(Fig.2, Fig.3)。「家族と共同で使用する場所の家具の大きさ・数や配置の工夫について、意見を述べたり整

えたりする」といった行動面は、事前事後では差がなかった。行動面に結びつかなかった点については、今後検討する必要がある。授業後の自由記述には「実際私も急ぎの課題があるとあたったはずみで本棚からものが落ちてきてもそのままにしまったり、家族とのコミュニケーションをほったらかしにしまったりしたことがあります。だけど、この単元を通してそういう基本的なことに意識を向けることで、新しい何かが見えてくるのではないかと感じました。」「より良い住まいを考える上で、今の自分の家庭と対象して(を対象として)見ると、今まで見えてなかった面が見えてきた。そう考えると、自分が大人になって独立していくのにあたって、考えなければいけないことが見えてきたのでとてもよかったと思う。」などの記述があり、自分にとっての住まいを考えるきっかけとなったと考えられる。

(3)今後の課題

「家族・家庭生活」の教えにくさが指摘されているが、他の領域と横断していくことで、児童・生徒の学びが深まることが示唆された。今後、「家族・家庭生活」との横断の効果について検討を深めたい。